

第 21 回環境 NPO リーダー海外研修 報告書

淡海を守る釣り人の会

武田 みゆき

私の活動は淡海を守る釣り人の会の一員として琵琶湖・瀬田川の水辺の清掃活動をしている。淡海を守る釣り人の会は「琵琶湖への感謝の気持ち」「地域と、自然と、次世代につながる架け橋となること」などを目標に活動している。日々活動をしていくうえで課題がいくつかありそれを解決出来るヒントを見つけにこの海外研修に参加した。10日間の研修の中で学んだことを報告する。

1. 研修を活動に活かす

■ラインランド・ファルツ州 環境省 州環境情報センター

州環境センターではどのような仕事をしているのか詳しく教えてもらうとともにライン川の管理について学んだ。

ラインランド・ファルツ州環境省では事務的な仕事をしていて、5つの課と事業所があり、全体で5000人（森林局を含む）訪問した施設には400名の職員、他に300名の職員が働いている。ラインランド・ファルツ州には郡が30、町が250あり、ナショナルパークもある。

フェデラルシステムという制度を利用し14歳以上、14万人のひとがなんらかのボランティア活動（スポーツ・宗教・環境等）に参加しており、これは州全体的の41パーセントにあたる。

ラインランド・ファルツ州では活動をしているNPO・NGOに賞を与えている。賞は環境保護賞・動物保護賞・功労賞等。他には、定年した方にトレーニングを受講してもらい地域の自然トレーナーの養成、川の里親制度、新種や外来生物を見つけそれを報告するアプリを作り、市民が参加しやすい環境づくりをする（アプリの登録は3800名。開始から40万件の投稿がある。投稿されたデータはオープンな情報で誰でも閲覧出来る）など様々なことを教えてもらった。

また、ラインランド・ファルツ州では持続可能な生活を学校の先生から生徒に教えている。

州主催のイベントに地域の企業がお金を出すこともよくあることで州と民間企業が協働でイベントをおこなっている。ESDやSDGsは企業の株価に影響を与えることもある。

25年間ライン川の水質保全の担当をしていた博士に水質管理・ウォーターマネジメントについて話を聞いた。ライン川はアルプスから黒海に流れている河川で、全長約

1300 km、スイスからドイツを流れ、その間に 9 か国の流域をまたいでおり、ライン川の管理はEUがしている。しかしEUに加盟していない国を流れている箇所もあり全体を把握するには長年の経験が必要となる。

ドイツのライン川流域は全人口 8000 万人の約半分の 5500 万人が生活している。飲料水としての利用は 550 万人。また運河としての利用も盛んで世界第 2 位の年間 3 億トンもの物流がある。また、ヨーロッパ全体の製薬会社の 50 パーセントがライン川沿いにある。

このようにライン川流域の生活者・工業・農業等などはライン川に頼っているため、一時は魚の大量死・水質悪化等の問題があった。その為、河川環境や水質を改善しようと企業が川に排水を流す場合河川への環境負荷を考慮し、どの物質をどの程度流すかによって基準を決め、企業は川への負担を州に税金として支払う仕組みになっている。税金を取ることを始めるにあたって事前に州と企業が協議をして法律が施行される前に企業は改善努力をしたそうだ。

講義をして下さったラインランド・ファルツ州環境省のお二人に行政から見た NPO・NGO はどのような存在ですか？とお伺いしたら答えは「政策を実現してくれるパートナーである」と回答された。

私は住民（釣り人）・環境保全団体・行政と連携をしながら琵琶湖・瀬田川で清掃活動をしており研修初日のこの講義は胸が熱くなった。また、最後の NPO はパートナーであると言われたこともとても印象に残っている。使い古された言葉かもしれないが、多様な主体との連携協働の重要性を再認識した。

連携協働するためには互いに目的を共有し、時間をかけてよりよい関係を築き、個人個人が共感・共響しそれそのものが水辺の文化として醸成しながら作られていくものだと思う。

ラインランド・ファルツ州環境省のお二人から学んだことを自分の活動に活かしていきたいと思う。

2. 課題解決のヒント

私が今回の訪問団体で参考になったのは BUND の仕組みだった。BUND は国や企業からの寄付は受けず会員の会費だけで団体運営をしている。この独立性の確立は会員が多いから出来ることであって BUND はドイツ全体で 58 万人もの会員がいる。（会員数は 2018 年 11 月現在のもの）

BUND の収入の内訳は（2016 年度）全体で 2700 万ユーロ≒35 億程度。内訳は、会費 64 ユーロ、71%、プロジェクトに対して払われる補助金 6%、遺産相続 6%、国からの補助金 2%、情報提供料 2%など。これらの収入で団体運営をおこない、独立性を担保している。自己資金で自立し独立性を担保することで BUND は無色透明であり、自分たちの主張を行政や政治家・政党に利害関係なく話せる立場にある。BUND として支持して

いる政党はなく個々の案件に対して立場を変えている。BUND の会員の中にはさまざまな政党支持者が混在し会員同士で議論し、どの立ち位置でいくのか民主主義で決めていく。ここで大切なのは民主主義で決めていくというプロセスだ。ドイツは民主主義発祥の地でこの研修でドイツの民主主義について肌で感じる事が出来た。この経験は今後活動を進めていくにあたり根幹していこうと思う。

自ら活動していく上で課題だと思っていた人手不足や資金調達に関してもこの研修を通して多くを学んだ。想いの共有が難しいと思っていたが、達成するための近道はなく、丁寧に時間をかけて話し合いお互いのことを理解し信頼関係を構築していこうと思う。そして 20 年続く息の長い活動にする仕組みを作っていきたい。資金調達に関しては今後会で民主主義的に検討していきたいと思う。

ファウンデーションの講義では寄付を受けるにはどうすればよいかを教わった。戦略的に寄付の機会を増やしチラシ・パンフレットに記載することはもちろんのことながら、分野の違うメッセやフォーラムや様々な機会を活かすことをズバリと言われ目からウロコだった。また、ファウンデーションに関しては専門的に担当する人材が必要であると痛感した。また、私は釣り人のみにターゲットを絞っていたが琵琶湖の価値は釣り人だけでなく多くの人に広げられるということ、琵琶湖は日本にある湖だからと日本に限定していたが海外にも発信をして寄付を受ければ良いという 2 つの大きな気づきもあった。他には寄付者のメンタリティーを調べるということも教わった。

すべての工程が終了した最終日のふりかえりワークショップでは参加者全員が各講義でキーワードとなる言葉を出し合った。多くのキーワードが出されたので私のここに残ったものをいくつか紹介しようと思う。

中立性・市民運動・民主主義・裏表・グルッペン・給料は州から・外国人を受け入れる・自力・寄付の間口を広げる・パートナー・自然の代弁者・国の仕事を個人でも受けられる・地域 等。

これらのキーワードで少し研修の内容を感じてもらえればと思う。

そして最後にみんなで決めたメインキーワード。決まるまでかなり難航したけれど「感動を BUZZ らせる」と「グルッペンは力」の 2 つとなった。「感動を BUZZ らせる」はファウンデーションを行う上で必要な感動や共感という言葉からインスピレーションを感じたもので、相手の感情を BUZZ らせることが必要であるという意味である。「グルッペンは力」は地域の活動こそ NPO 活動の土台であり、個人がグルッペンとなりまたそれがグルッペンになる。そして大きな組織となるため「グルッペンは力」という

2つがメインキーワードとなった。

2つのキーワードを作るにあたり、この海外研修を新たなスタートと位置づけたかったため今まで使われていた言葉ではなく新たな言葉を創造しようと 21 期生が生み出した言葉である。読まれて何かわからないと思われた方もいると思うがそこは考えず感じてほしい。

3. 全体を通しての感想

今回のドイツ研修を通して感じたことは視点を変えれば可能性は広がるということだった。環境保全団体として NABU や BUND から学んだこと、ファウンドレイジングを通して学んだこと、森のようちえんで学んだこと、それぞれたくさんの学び・気づきがあった。

私はこの研修に参加するにあたり多くの気づきが欲しいと思っていた。それは研修に行く前の事前学習でドラッカーの「わかりきった答えが正しいとは限らない」という言葉を知って自分で自分の可能性をなくしていたことに気づいたからだ。

自分が知っていること、考えていることは狭い範囲でしかなく、今まで関わりのなかった新しい人との出会い、コミュニケーションを通して、理解し、課題を共有しながら、毎日研修プログラムをこなしていく。それを通して経験値を上げようと思ってスタートした。

不思議なことに目を追うごとに自分では気づいていない凝り固まっていた自分の思考回路、思っていた（思い込んでいた）ことを 180 度変えられるような答えがどんどん出てきた。

所詮私の考えていたことなど私の人生の中でだけであって、出会ったみなさんの経験を基にした意見は非常におもしろく胸に刺さるものがあった。

つまりこれは同じ環境 NPO という分野なのだけれど異文化コミュニケーションをしているようでこれほど刺激的なことはなかった。

またドイツの方々のお話を伺うと発想が実に面白く、なぜ？なぜなの？と、こちらの考えに大いに疑問を投げかけられた。なぜ？というストレートな疑問はこちらとしては戸惑ったというか、ぐうの音も出なかった。そのインパクトのおかげでファウンドレイジングの特別講義は一生忘れない経験となった。

今回の 21 期生は女性 4 人、男性 1 人、合計 5 人という構成で北海道・東北・近畿・九州と地理的に日本全国まんべんなく集まった。その中で年齢・地域性・活動歴など違いはあるけれど 1 つ共通点があった、それは全員が事務局長という立場だったということだ。研修中に事務局長という立場の難しさをワークショップで語り合いみんなで悩みを分かち合った。そのワークショップで私が感じた「共感」は気がつく「安心」に変わり今後どうしていけばいいのか、こんな場合はこうしたらいいんだな。と気づかせてもらった。

この研修を共にしたみなさま。出会えたことを心から感謝しています。このご縁をずっと大切にしていきます。各地で頑張っている仲間の活動に足を運びますので勉強させてください。この先、またどこかで会える日を楽しみにしています。

最後にセブン-イレブンの募金箱に募金をして下さったみなさま、この研修はみなさまのお気持ちで成り立っています。その重みを感じながらの研修でした。ドイツでの研修を通してたくさんの気づきと経験を積むことが出来ました。ありふれた言葉ですがこの経験を活かして今後の活動に邁進し、社会に貢献出来るよう精進してまいります。